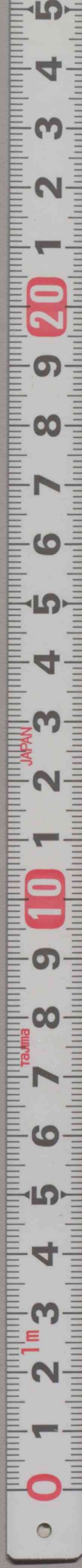


養蠶摘要
完



竹書大久著

養蠶蠶摘要 完

元治二乙丑歲 桑林堂發板

養蠶蠶摘要序

組徳家世以販絲為業是以自蠶
蠶之道以至樹桑之方亦莫不講
其宜研其精矣一日見石田君所
著養蠶蠶摘要者較乎前即嘆曰嗚呼
斯道之大行也豈直五十年之大事

其抑亦 國家之幸也。庶幾
先聖王勸善懲惡之意始赫然于世
乎。且夫僻邑遠村。而不著習而不
察。終身由之。不知其道者亦多矣。
知真道与不去。其得失利害。豈當
隔雲泥哉。固請上梓公。施世不止

矣。若曰。吾不然。遠東以爲人
笑也。久矣。雖就詩人。而以下體
之。亦對之。雖就詩人。而以下體
我。所与。遂允其請。需。余。并。一。之。
余。固。成。爲。勸。學。之。眼。躬。親。一。之。強。
之。一。下。筆。之。其。愛。世。也。中。心。且。厚。又

美祖神水々香已^{テ、}匠人樂^{シムノ}取^テお人^ニ以^ニ
為^レ善^クく^ヲ言^フた^ル辭^{スレ}以^ニ不^レ文^ヲ飲^ル
然^{トモ}直^ニ書^メる^ル為^レ不^レ告^ル以^ニ應^ス之^ヲ。

元治二年歲次乙丑二月穀旦

如賀 河波有道撰采虫



美祖神水々香已^{テ、}匠人樂^{シムノ}取^テお人^ニ以^ニ

中^{コガヒ}の^{ウケモチノ}ま^{カミ}。海^{ウケモチノ}神^{カミ}子^ノ好^{コト}ま^{カミ}と^{カミ}。神^{カミ}氏^ノの^{カミ}事^ノ

を^{カミ}。ま^{カミ}を^{カミ}る^{カミ}ま^{カミ}と^{カミ}好^{コト}た^{カミ}ぬ。

旌^シ甲^カ又^{マタ}宣^ノ法^{ホウ}御^ミ紀^キ子^ノ使^シ后^コ妃^ヒ紀^キ桑^サ人^ニ勅^シ誓^チ軍^スと^{カミ}

又^{マタ}禮^レ記^キの^{カミ}名^ナの^{カミ}ま^{カミ}。お^{カミ}ま^{カミ}。於^{カミ}の^{カミ}ま^{カミ}を^{カミ}好^{コト}ま^{カミ}と^{カミ}。

記^キの^{カミ}ま^{カミ}を^{カミ}好^{コト}ま^{カミ}と^{カミ}。ま^{カミ}を^{カミ}好^{コト}ま^{カミ}と^{カミ}。ま^{カミ}を^{カミ}好^{コト}ま^{カミ}と^{カミ}。

信^シ妃^ヒ乃^ニま^{カミ}の^{カミ}樂^レ。氏^シの^{カミ}ま^{カミ}を^{カミ}好^{コト}ま^{カミ}と^{カミ}。ま^{カミ}を^{カミ}好^{コト}ま^{カミ}と^{カミ}。

有り。婦人。道。教。と。い。ふ。業。を。さ。す。一。と。い。は。れ。し。る。も
 コガヒラ スムル ココロ
 勤。勞。の。一。心。を。身。に。こ。め。て。は。ま。は。る。と。い。は。れ。る。に。對。し。て。は
 一。心。を。曲。り。を。述。す。と。い。は。れ。る。と。い。は。れ。る。と。い。は。れ。る。
 本。を。編。要。は。え。て。い。は。ぬ。事。も。な。し。と。い。は。れ。る。と。い。は。れ。る。
 實。行。の。體。則。の。國。家。乃。步。履。を。い。は。れ。る。と。い。は。れ。る。
 元。治。元。年。の。書
 竹。屋。の。書

養蠶摘要

竹會 石黒千尋著 石崎朴軒 訂正

○一棚三返取の仕様

一棚の寄ひ柳子入用。二棚の種寄ひ上
 おてこを急おくれまうけ

三棚分用意す。初午のころ。其種紙を三つ切。二つ
 分。常の通に扱ふ。此分並の如く。八十八夜の夜出生と

砂を二つどん土瓮どごう又穴瓮あきぐら或根板下へ箱入あひねして暖あきき
所ところは土瓮どごう八十八夜や十日ま前ま柱たね一枚まを出いし暖あきを場ば下もとへおく
此分このぶん九十や八ちゅうせう夜やろのう出ま生いす。砂一枚ま八十八夜や出いし暖あきがある
場ば下もとへおく百三夜やろちゅうせう出ま生いす。各七八日おちを隔へて出ま生いせる
やうに仕してるく。さればに眠みに起たちかて各七八日あて宛あんたうひぢ
隔へる物もの之よ依よて初はじめのから隔へふかり。初はじめの後のち九十

八夜やろちゅうせう出ま生いの蚕かい。終すまくこ。蟄すま蚕こと成なべら。是これは初はじめの棚たみこ
又寒やうこ。其そのからもあります。初はじめの後のち又百三夜やにま出ま生いの蚕かい
蟄すま蚕こと成なべら。是これは初はじめの棚たみこを穿やつく。右みぎの通とほ七八日あて。日
づひを隔へて。三さん夜やもあります。ゆゆ急きぎぎもあります。一いち時じあらひ
むむして大おきくよよ。是これは一いち棚たみこ穿やつくひて。ままもまもも目めをいれる
人ひとの返へんえの仕し様やうようららぶ。三さん倍ばい場ば三さん日じつの繭まをいれるは

方ゆゑ大なる徳分あり。
夏蚕ハ早キ程々おそろ程々あり
買入て右のどく之返えよるがト

越中みヶ山の村々蚕所にて一軒一軒とも百メ目

或は百に五十メ目も入る者多し。各一柄二に返りて

こりてゐる。数百の柄の並場所。指支る等。但一程

出まの。迅速に二回一程一柄一返りて

の蚕よ。日夜八九交り。葉をくると。二番よやと

べき分よ。六七交り喰せ。三番よ寄ふ。二に返りて宛喰

せ。二眠の柄子。因て葉加減をあり。一時は極密に

そり考へ葉加減第一として出下し。は法もろ

○蚕そだて方の心得。并ニ病の子當方

蚕の病の出る方と扱ひ方との悪あひま。病付ては療治方

先打の物と云り。春蚕出まの時。二つ株のほり。おき。甚密に

事ありきと云ふ入度、至れば葉を喰得せ。流くきあてら
れてい、足りいけて黒くあり終る下、筋りと云病となる。性氣衰る
古葉の下
かまらうふるよろ、依てきき日、屏風にて囲ひ尚きくば、火清よ
事ありと云し、火をいけ、圍の内いれ、蚕室を七十三度斗の暖さするなり
寒暖計よてもるるべ、主度、此氣候、蚕の好むなれば、心を用ひて
裕志、とんそ、位の氣候、きくば、火清よ、暑くば、戸窓を閉き、涼風をへ、扱あせ

●常食より前日摘の葉を喰せ、きき葉を常よくとせ、
不寝と云病となり、寝事多く、頻に這どり、後向き汁を出し
葉喰あ、終る死、色、他、比、昔、細、撰、る、捨、べ ●蚕下の古葉、多く積り
温湿の蒸氣を、透込、尿つより、白殭蚕と云病となり、扱方の
蚕一時、ゆる石の如く、堅くなり死す、恐ぶき病多し、常ニ、
扱、く、うら、を、扱、い、ま、り、む、せ、ら、る、や、う、ま、ま、べ、●暑威あて

られ又また甚おそろし矣なり南みなみ風かぜあてられらる。殛つら蚕まゆと云い病やまひを發おこし腐くさりたれ
あつこく 小こ室むろのあひひ若わか狭せまくらうとてて俄はやく南みなみ風かぜとわりわりと
あつこく 死ししてて暖ぬく氣きする事ありと蚕まゆのい甚おそろしきあまき風かぜ也なり南みなみをふさぎとその外ほかの
と戸と窓まどをひらき涼きやうよよ又また生なま葉はをい下くだげよくひやして
よ不ふ時ときあまむく吐くきすべい南みなみ風かぜをまぐたり次のよ唐たう箕きをい蚕まゆ室むろに
たいひや大たい件けん一いつ豆まめおの位ゝのものもればあらうくハむらつら村むら方は田た柵さく草くさ拂はらひま
たいひや大たい病人びやうにんをあつこ心こころにまて由由よしよしといふ事也なり●村むら方は田た柵さく草くさ拂はらひま
ひひまのいせせ六む交こうの定食じやうじきも漸く二二に交こうあまむく吐くきすべいの習

かいとややあまり音もけねままり早いつ竟きやう病びやうを振道たう運うんあれば援
ここ心を用ふべい塩氣け臭くさ氣き香かう氣き螺らの音砲ぱう声せい雷らい鳴なりを嫌む

○菜葉さいの貯たくへや

め芽め菜さいの貯へ瓶又また箱はこ桶おけホ何れも蓋ふたして風あてざれば二
三日さんあまるびぬ物多おほく貯へて出いる或は板の音ホ口方かたを興
い風かぜあてざせて吸べい穴あなを貯へる尤もと常に菜多おほく貯へる中なか
ああらうく井いの内うちへ下げてはし

いさうてあつくまゝのもへ、反古籠を爰うしこ堅ま入て、
抜き垂ときりしまる事なり。おろ下を上へて返しきざり

ぬれ糸くるとべくぐず。晴天の中ニ摘貯せしむるべし

○掃おろし仕様

糸糸を細く刻み種紙一面振るれば、
付く其蚕を糸と共に羽箒てはきおろせば、
糸を振りおろす

○蚕幼少の程うらる様

粟のぬり又粗糠をうらる細く挽割平等糸蚕の上へふひを
らる蚕足と嫌ひて糠の上へ登る此時刻に糸を振るれば
おろし糸を糸と共紙を
境として下へ古糸蚕屎斗おろしを捨べし

○眠蚕の目き

いろりい いろりい 色変り少く白茶を帯び おびくちばい 小さく成る付元 ちもと 小角 さんかく 小山形の柢 たき ち ち 運動 うご 葉下 くわ 堆 たい 蚕 か 多 おち

○起蚕の目き

これまで これまで くちばいぬけおち あち 是 こ 是 こ の口 くちばい 脱落 おち 形 かたち 口 くちばい 大 おほ きくええ こ 是 こ の全身 ぜんしん の皮 かわ 尻 しつ の方 かた おくり出 い して脱落 おち 白茶色 ちやくしやく 変 か 違 ちが 形 かたち も大 おほ 成 なり

○独蚕の目き

よ よ おま おま のち のち り り こ こ 四 よ つ起 お の後 のち 春蚕 はるか の第 だい 七 しち 日 にち 夏蚕 なつか の第 だい 六 ろく 日 にち 以 も 至 いた り り 首 くび の方 かた 少 すく 水色 みづいろ 変 か 透通 すうとお や や 形 かたち 少 すく 疲 つか 頻 しん 延 のび 上 あ 葉 は も も 事 こと を好 この ず ず 糞 ふん も大 おほ き き 和 わ 成 なり 十 じゅう 分 ぶん 独 ひとり 蚕 か を催 もよほ せ せ 少 すく 葉 は 全 ぜん 身 しん 水色 みづいろ 透通 すうとお や や 甚 しん 一 いつ 葉 は 寄 よ ひ ひ 方 かた の仕 し 振 ふる 等 らう

○寄ひ方の仕振等

逆一枚の先端と中口所へ六ヶ所穿ひ代を入る是をヤト穿ひ代ハ

矢留の本の枝葉程から何をもよこれも藁苞の方より物

右葉苞を中ぶらして二所葉苞入宛あて返かへひらき立六ヶ所

やとひ代はわら苞敷午入用これ是は二枚の入り用三枚十階葉十枚

とむでのるみヶ所へ春蚕百匹宛夏蚕八匹宛蚕を入びまり

葉をす。是を埒葉と云これ一枚の葉みヶ所の埒葉を蚕入百匹。是にてまの月

四月斗えり糸三十三文と云べし。是は春蚕の埒

十二時すぎて糸をを始め十八時とまりして八九分繭の形ちをき

此時このときも糸ををきぐる蚕を撰えらび別ヶ所穿ひ返す是をハ

やとひ返一の糸十二時をて糸をを十八時とまりて繭作まる

糸も糸いとけけぐる蚕をあららび重かさねて別べつやとひまる事こと右みぎも同おなじ

蚕柵の寸法幅たかみ尺七寸五たか尺たか奥行二尺六寸高たかさ五尺

七寸五たか尺たかはちこの内下を寸除たか紗たか五尺五寸五たか尺を柵十階たかり

天の空遊の柵と兵よ土階割合柵と柵の留製とて横五寸四五〇丸

ごん竹よても二階は本宛ち製し都合に十口本入用

と製し●蚕折寸法幅一尺寸八分奥行二尺七寸

高と寸みり此箱を大とて重ね入子作りに重を二

組して都合十組製とて箱の敷是よて返えの蚕

敷二万五千匹普通より糞折を用ふも糞折カハラガ七十枚以上入用とまき

○蒸繭の仕様

春蚕はよるにちり十日目の早朝又性弱き化第十七日目

ちよにちり第七目の頃蛆と化して這出蛆の形ち栗虫よく依て

糸よ挽んと思ふ二匹とも蛆の出を相家として早く蒸せ

●夏蚕はまるにちり十日目の早朝蝶と化但し第十日目に

夏蚕は垣化とて依て是はまるにちり六日目七目目の内蒸

ヤとひるる日分（日分）第八日（八日） ●其蒸（蒸）格（格）の蒸籠（蒸籠）の大き（大き）さよ田（田）炉（炉）裡（裡）を囲（囲）
又第十日（十日）とま（とま）るべし

一面（一面）中（中）堅（堅）炭（炭）をち（ち）埋（埋）其上（其上）よ藁（藁）を焚（焚）其葉（其葉）灰（灰）を炭（炭）火（火）

にく（にく）せ火（火）氣（氣）をわ（わ）らげ蒸（蒸）ろ（ろ）の中（中）厚（厚）き紙（紙）を爰（爰）撰（撰）た（た）

能（能）ま（ま）を（を）入（入）る藁（藁）の上（上）九（九）ヶ所（ヶ所）斗（斗）椿（椿）の形（形）葉（葉）を焙（焙）じ蒸（蒸）す（す）爰（爰）

紙（紙）の（の）げ（げ）ざる（ざる）やふ（やふ）火（火）加（加）減（減）由（由）の（の）ま（ま）づ（づ）ぐ（ぐ）ぞ（ぞ）槎（槎）の（の）葉（葉）茶（茶）色（色）よ（よ）変（変）れ（れ）が

夫（夫）と（と）下（下）上（上）の蒸籠（蒸籠）を下（下）へ又蒸（蒸）る（る）む（む）び（び）た（た）ま（ま）る（る）陰（陰）干（干）じて

風（風）合（合）ま（ま）る（る）べし
上（上）と下（下）へとも返（返）ま（ま）る（る）べし ●湯（湯）む（む）び（び）常（常）の強飯（強飯）を蒸（蒸）如（如）くす

べし是（是）も槎（槎）の新葉（新葉）色（色）変（変）ま（ま）る（る）夫（夫）と下（下）へ但（但）も（も）干（干）ま（ま）る（る）べし

ども急（急）よ乾（乾）る（る）蒸（蒸）る（る）藁（藁）やわ（やわ）ら（ら）ふ（ふ）ち（ち）り（り）漬（漬）ま（ま）る（る）形（形）わ（わ）く

ひ（ひ）れ（れ）ば火（火）蒸（蒸）の方（方）と（と）ち（ち）ぎ（ぎ）べし ●火（火）む（む）び（び）の（の）せ（せ）ろ（ろ）底（底）洞（洞）細（細）強（強）

最上（最上）の（の）竹（竹）簀（簀）をあ（あ）て（て）は方（方）と（と）ん（ん）留（留）ま（ま）る（る）べし

○桑（桑）の葉（葉）刺（刺）ま（ま）る（る）やう（やう）の心（心）得（得）

庖丁ほうちょうをよく研とぎて切きりきれぬ庖丁ほうちょうの切きり口くち痛いたくては時とき々とき逢あて
 庖丁ほうちょうを拭ぬぐふ●掃はき下の泥どろ●柴しばアア方斗ほうときまる●二おき起おきるア又また重おも
 四よ方斗ほうと●二おき起おきるア方斗ほうと●三おき起おきるア方斗ほうと●四おき起おき
 ら二に寸すんアア方斗ほうと●埴はち土つちハハ方斗ほうと刺さむべし●細こま刺さ喰く
 世よに方斗ほうとくして砂すなを事ことなく犬いぬく切きて喰くせ●柴しばを喰くひのこ
 始はじめ終しまの初はつ●益えきの柴しばを費つひして損そんなり

○右みぎの外のう蚕かい出生しゅっしんする其その日ひ●日ひ々々柴しばを喰くひす刺さ限げん●うらをえ
 捨する日限ひげん●右みぎ柴しば蚕かい屎しを●寐ね起おきハハ方斗ほうとの日限ひげん●柴しば●附つ柴しばの日限ひげん●糞ふん蚕かい
 とする日限ひげん●やとひ上あの日限ひげん●まるまるちる日限ひげん●糸いと挽ひきの日限ひげん●蝶てつ化か
 日限ひげん●春蚕はるかい●十六じゅうろく●夏蚕なつかい●十日じゅうにちの留とどめ事ことなり●別べつ紙し二ふた枚まい記き
 空あくもれば書かき相あい●あねえ合あわせ●え得とくをべし
 ○蚕かいをかえんとおもむ●やう第一だいいちその食物しょくじとする●柴しばの氣きを

てい叶をぬきわたり。依て葉時うゑの仕格。さし木のまじり
 葉若悪の論。是亦別記。一、成限。二、多く。三、極。四、まじり
 ○山繭養法秘傳抄と云書。山まをほくる仕格を記し
 よくかひ試みたる。追て其方をあらわす。

養蠶摘要終

春 養蠶永曆

春はこ出生より。まをさかり。終ふら
 て。よとわらままでの。日々のやまひ
 方ホ。こころえね。べき事を委く記す

夏 養蠶永曆

これハ。わつこの。まをさ。て方。て。右。同。だ。
 ひとまも。一枚。むり。石黒翁の。数年。試。み。
 めり。著。は。され。を。懇望。して。世。弘。め。ぬ

桑柘まじりうゑの傳

あれハ。桑の。まじり。の。仕格。うゑ。や。う。
 さし木の。出。を。記。され。り。二枚。摺

元治二乙七年三月

石田太左衛門 梓

加州金澤下堤町

系物 老店

組屋徳右衛門 製本

87

小野寺文庫
4919

群馬県立図書館



0499419-0